西無田の東北隅　現在の矢田氏方の東方、浮島熊野神社の神霊を分祀して西無田雨宮神社が創建された所。後年遷宮されて現在地に鎮座して

正公が眺望になったと云う伝説があって今なおその名は人々の間で使われている。

（語りべ学習会）

六　ふるさとの人物

六・一　秋津小学校出身者

明治二十二年（一八八九）秋田・沼山津の二村が合併して秋津村となり、現在地に秋津小学校設立。発足以来百十年余、ここから輩出した人は数千を数えるであろうが、本校卒業生中から次の人々を紹介する。

氏名	卒業年度	主な経歴
彌富破磨雄	明治二十一年（一八八八）	昭和天皇傅育官・邦文学者 長男啓之助氏は元人事院総裁
三善　信房	明治二十五年（一八九二）	衆議院議員・厚生政務次官
高橋　守雄	〃	滋賀・長野県知事 第七代熊本市長・熊本商科大学学長・理事長
内山　隆道	明治二十九年（一八九六）	陸軍少将・終戦時　佐賀関要塞司令官
吉本　聖二	明治三十一年（一八九八）	秋津村産業組合設立初代組合長・第九代秋津村長
志内　ヒデ	明治三十一年（一八九八）	県立第一高女高等科教諭・熊本女専教授
富島　末雄	明治三十三年（一九〇〇）	戦前の熊本市小学校長会会長・第十三代秋津村長
彌富秀次郎	明治四十四年（一九一一）	営林署長・熊本木炭事務所長・元横井小楠木顕彰会会長
杉田　博	大正　三年（一九一四）	医学博士・杉田小児科病院長
上田案山子	〃	熊工電気科長・熊本市立工業学校校長・熊本県科学研究所所長・熊本工大教授
光岡　均	大正　四年（一九一五）	陸軍中佐
彌富　忠夫	大正　六年（一九一七）	農学博士 大分短期大学学長
浄住　勤護	大正　八年（一九一九）	熊本女子大学教授（英文学

氏名	卒業年度	主な経歴
浄住　端雄	大正　十年（一九二一）	熊本大学医学部名誉教授
内田　芳朗	昭和　六年（一九三一）	元参議院議員・竹中組役員
中山ミエ子	昭和　十一年（一九三六）	第七代熊本県農協婦人部協議会会長
藤山　増美	昭和　十四年（一九三九）	熊本市会議員・第三〇代熊本市会議長
上田　楠生	〃	地元で内科小児科医院・熊本保健所長・医学博士
菊岡　実	昭和　十五有（一九四〇）	向陽台病院副院長（旧姓栄田）
永田　虔二	昭和二十九年（一九五四）	永田病院院長
三藤　省三	昭和三十九年（一九六四）	弁護士
彌富　親秀	昭和四十二年（一九六七）	熊本整形外科病院脳外科部長

熊本市発展の基礎をつくった吉岡橋高守雄

熊本市役所近くの坪井川沿いの公園を、高橋公園といいます。熊本市名誉市民の一人である第七代の熊本市長　高橋守雄の名前から付けられたものです。

では、公園の名前になっている高橋守雄とはどんな市長だったのでしょうか。そして、どんなことをした人物だったのでしょうか。

「三大事業」の成功

守雄は、明治十六年（一八八三）に上益城郡矢部町に生まれ、秋津小学校を明治二十五年（一八九二）に卒業しました。大学を卒業して、東京で警視庁の役人になり、大正十二年（一九二三）に三九才という若さで熊本市長になりました。

今でも高橋守雄市長といえば、大正の「三大事業」で有名な市長と言われます。

では、「三大事業」とは何でしょうか。

それは、「熊本市営の電車を走らせたこと」「各家庭に水道を引いたこと」「市の真ん中にあった軍隊を別の場所に移したこと」です。

実は、熊本市が「大熊本市」として発展したのは、この三大事業を完成させたことによるといわれています。

守雄が市長になる前の熊本市は、周りの町や村といっしょになって、これから大きく生まれ変わろうとしているときでした。

大熊本市

大正十年（一九二一）六月一日、熊本市と飽託郡の黒髪・池田・花園・島崎・横手・古町・本山・本荘・春竹・大江の各村及び春日町の一一町村が合併して「大熊本市」が誕生した。

市長になった守雄は、さっそく市民生活の安定と向上のため、三大事業

市長になった守雄は、さっそく市民生活の安定と向上のため、三大事業の仕事に全力で取り組み、次の年の大正十三年（一九二四）に見事にやりとげたのでした。

その他にも、守雄は鉄筋三階建ての熊本市役所を完成させ、水前寺競技場の建設にも取りかかりました。

市長としてわずか三年半の間に、これだけの仕事をやりとげた守雄は、熊本市発展の基礎をつくった生みの親といわれています。

熊本市が電車を走らせる

みなさんは、熊本市営の路面電車がいつごろ出来たか知っていますか。今のような市営の電車が走り始めたのは、大正十三年（一九二四）の八月一日からです。

それまでは、熊本市内を軽便鉄道が走り、一部では電車も走っていました。しかし、経営がむずかしい会社もでてきました。

そこで、市民の間から「ぜひ、市のほうで電車を走らせてほしい。」という願いが出てきました。

守雄は、都市づくりのためには、市民の生活が便利になることが一番だと考えて、路面電車を市営の事業として経営することに決めました。

はじめは、「熊本駅～浄行寺」間と「水道町～水前寺」間だけを走らせました。

白川を渡る電車のために新しくつくられたのが、今の大甲橋です。工事の記録では、「はば八間（約一四・四㍍）、長さ四十間（約七二㍍）の鉄筋コンクリートづくり、費用は十万三十円（当時・今のお金のねうちに直すと、約二億円位に当たる）」だったそうです。

十五台でスタートした電車は、待ち望んでいた市民に大歓迎され、たいへん人気でした。満員で乗れない客も多かったため、「お急ぎの方はどうぞお歩き下さい」が、はやり言葉になったほどでした。

その結果、すぐにまた新しく三台の電車が走るようになったそうです。

しかし、すべてがよいことばかりではありませんでした。電車の登場によって、人力車を引く人の仕事がなくなったのです。

そこで、守雄は市議会と相談して、人力車を引く人たちへ、市からお金を出すことに決めました。仕事がなくなった人たちを助けるために、お金を出したことは、全国的にも例がありませんでした。

このような守雄の努力によって誕生した市電は、熊本市のシンボルとして、現在まで走り続けているのです。

上水道ができる

「水の都」とよばれる熊本市には、昔から多くの地下水がありました。しかし、明治四十五年（一九一二）ごろは、熊本市内七一三五戸の井戸のうち飲料水として使えるものは、全体の約六五パーセントだけでした。そのうえ、下水道も整っていなかったので、市民から「ぜひとも、早く市全体に水道を整えてほしい。」という声があがりました。しかし、多くのお金がかかることや、水が足りなくなることを心配する農民の反対運動があって、そのままになっていました。

そこで、守雄は水道の建設は、都市に住む市民のためには欠かせない仕事であると考えました。そして、八景水谷に井戸をほってくみ上げた水を、一度立田山にポンプで上げて流すという方法を提案しました。

この方法が市民にも受け入れられ、長い間市民が望んでいた水道の計画が、ようやく進められることになりました。

大正一十三年（一九二四）一一月、水道が完成し、通水式が行われました。これで、市民は安心して水を飲めるようになり、病気も減って、豊かな生活ができるようになりました。

教育者として活躍

熊本市長をやめた守雄は、国の役人にもどりました。
そして戦後は、昭和二十一年（一九四六）に熊本語学専門学校の校長となり、熊本の私立学校の教育に当たりました。
あるとき、守雄はこれまでの専門学校を短期大学にするために、東京の役所をかけまわっていました。
その途中、すりにあわないようにわざわざ混雑していない電車を選んで乗ったのですが、何度もすられてしまいました。
「警察官だった人が、すりにあうなんて…」と、周りの人たちも不思議がりました。
そのときの守雄は、すりにも気付かないほど熱心に、短期大学のことを考えていたのでしょう。
「誠意と努力で」というのが、守雄のモットーでした。このような守雄の働きかけによって、熊本語学専門学校は、熊本短期大学になりました。
昭和二十七年（一九五二）には、立田山にあった校舎を大江に移し、昭和二十九年（一九五四）には、熊本商科大学をつくって、学長・理事長として教育や経営に当たりました。
守雄の人がらを知る手がかりとして、他にもこんなエピソードが残っています。
昭和二十八年（一九五三）の「六・二六水害」のとき、子飼や渡鹿付近で七三世帯（二九三人）が住む家を流されてこまっていました。そこで守雄は、住民を大学の校舎に避難させて世話をしました。
にぎりめしを配って歩き、衣類をおくったり、週に一度は校内で映画を上映したりもしました。
このような数々の人間味あふれる行動力で、市民のため生涯をつくした守雄でした。守雄が市長のときにできた市役所の玄関は、最初に紹介した高橋公園に、今でも大切に保存されています。

（熊本市教育委員会発行　郷土読本　ふるさとくまもとの人々）

一八・二一　歴史上の人々

甲悲宗運親直	天文一〇年（一五四一）頃御船城主に。永録八年（一五六五）竹宮鶯（現中無田吉住氏宅）に城を築き、一族の甲悲正運を居城せしめた。天正一三年（一五八五）に死去。
甲悲飛驒守正運	鶯城に居城し、永録八年（一五六五）黄鳥山法光寺（現鶯観音）を建立する。
洞春和尚	御船辺田見の黄海山東禅寺の住職。甲悲飛驒守正運の招きで黄鳥山法光寺の開基となり、両寺を兼職して、十一面観世音菩薩・甲悲宗運の像を自刻し仏殿に安置する。
木山備後守惟久	天正年間（一五七三～一五九一）の木山城主で有名な連歌師。元亀二年（一五七一）に浄福寺を再興する。
島崎半兵衛尉　正徑	文禄・慶長の役で加藤清正朝鮮出兵の際、船頭かしらとして従軍。帰国の途中船に付着した奇木を持ち帰る。後年その奇木で西無田雨宮神社の御神体となるゆやろきき（由屋浮木）を刻み祭祀される。西無田島崎家の祖と云われる人
島崎久兵衛正隆	島崎家を継ぐ。寛永九年（一六三二）加藤家改易後浪人。寛永十三年（一六三六）沼山津郷間島に転住し漁猟及び開拓に従事し、慶長の役の帰路父

	が持ち帰った奇木に神像（由屋浮木）を刻み祭祀すると云う。（川尻町史）
原田彌右衛門	加藤清正の家臣。文録六年（一六〇一）沼山津村の内四百石が宛行われている。
山田入道正信	年代は明らかではないが、光輪寺の開基と言われている。
明義	熊本順正寺の法弟。明歴三年（一六五七）一代僧業の許可を得る。その後法榮まで十一代願い続けたので世襲となった。（現在の光輪寺）
慈観	天正年間（一五七三～一五九一）の兵乱に罹り、堂宇等すべて消失した時の浄福寺（天台宗）の住職。仏像のみ土中に埋め置き、その後三代目の観清と一小堂を建立して本尊を安置した。
秀海	熊本西光寺の法弟。慶長一八年（一六一三）一代僧業の許可を得る。 浄福寺が天台宗を改宗、浄土真宗に帰依した初代
八重桜新左衛門	寛政初期の中無田村の庄屋で、長さ四百二十二間幅五間・深さ五尺の新たな堀を掘削した。その恩恵を蒙る田地二十町歩、村民歓喜して「しんじゃ堀（新左衛門堀）」と呼んでその偉業を讃えていた。寛政一〇年（一七九八）八月十日に死去。

	墓は中無田の間島橋近くの県道沿いにある。
荒木萬蔵	上益城郡会所役人。萬蔵堀は文化年間（一八〇四～一八一七）に、この人の手によって掘削されたもので萬蔵井手とも呼ばれている。
河瀬典次	十九代沼山津手永惣庄屋（一八四五～一八五九） 河瀬安兵衛兵の嗣子、横井小楠の弟子。 嘉永年間（一八四八～一八五三）に裏井手を掘削した。夫人さだ子は横井小楠夫人つせ子の妹。
古賀喜三太	沼山津・下津代里の稲荷社の木造女神座像を入れた木箱の右側面に「明治十四年二月吉祥日　沼山津神社祀掌　古賀喜三太藤原辰臣」と墨書している。 古賀喜三太の籍は、秋田村五四番地（西無田）で明治初年頃より、沼山津神社・中無田神社・西無田神社の祀掌。後神官となり、金峯山周辺の神社数社を受け持っていてその氏子から尊敬されていたそうである。
富島末雄	熊本市との合併を推進した秋津村最後の村長。（第十三代、昭和二十二年～昭和二十九年） 先人の努力の概略でも後世の人に残しておきたいとの思いから、公務の激務のかたわら、「秋津村略史」を執筆。昭和二十九年九月三十日熊本市の合併記念として秋津村全戸に贈られた。

後浪人。寛永十二年（一六三五）沼山津郷間島に転住し漁猟及び開拓に従事し、慶長の役の帰路父

沼山津手永惣庄屋

沼山津手永の惣庄屋は、寛永十年（一六三三）から寛政十年（一七九八）までの一六八年間・九代は光永氏の世襲であった。しかし沼山津手永の惣庄屋の任命の仕組みは、寛政十年（一七九八）をもって大きく変わる。即ち、光永氏の世襲から交代制へと転換したのである。

こうした世襲惣庄屋の交代劇は沼山津手永だけに起こったのではない。領内全般をみても元禄期（一六八八～一七〇三）から惣庄屋の新任・配置替えがみられるようになる。そして享保（一七一六～一七三五）から宝歴期（一七五一～一七六三）にかけて、従来の在地有力者による世襲の惣庄屋にかわり、一領一疋クラスから惣庄屋が登用され、三～五年のサイクルで配置替えされるようになった。

	名前		期間		備考
初代	沼山津（光永）四兵衛	惟重	一六三三	寛永一〇年　五月	一六五一　慶安　四年　五月一三日　病死
二代	〃	惟泰	一六五一	慶安　四年　六月	一六六六　寛文　六年　二月二四日　〃
三代	〃	惟行	一六六六	寛文　六年　二月	一六七一　寛文一一年　五月一二日　〃
四代	〃	惟信	一六七一	寛文一一年　五月	一六九六　元禄　九年一二月　免
五代	〃	惟直	一六九六	元禄　九年一二月	一七一九　享保　四年　三月一六日　病死
六代	〃	惟直	一七一九	享保　四年　三月	一七四三　寛保　三年一二月二六日　〃
七代	〃	惟晴	一七四四	延享　一年　三月	一七四九　寛延　二年一二月　五日　〃
八代	〃　七助	惟武	一七五〇	寛延　三年　二月	一七八八　天明　八年　四月　免
九代	沼山津（光永）四兵衛	惟明	一七八八	天明　八年　四月	一七九八　寛政一〇年　一月　高森へ（不着任、六月免）
一〇代	小堀宇右衛門		一七九八	寛政一〇年　一月	一八〇七　文化　四年　八月　九日　高森から・免
一一代	田上　格次		一八〇七	文化　四年一一月	一八〇九　文化　六年　病死
一二代	間部忠右門		一八〇九	文化　六年一二月	一八一一　文化　八年一二月　九日　鯰と併勤
一三代	園田養助		一八一一	文化　八年一二月	一八一三　文化一〇年　六月二七日

一四代	園田健助		一八一三	文化一〇年　六月	一八二七	文政一〇年　五月一四日		
一五代	多田隈淳蔵		一八二七	文政一〇年　五月	一八二九	文政一二年　一月一四日		
一六代	緒方伝内		一八二九	文政一二年　一月	一八三七	天保　八年　四月二二日		
一七代	光永熊助	惟資	一八三八	天保　八年　五月	一八四五	弘化　二年　六月一七日		
一八代	下山群次	惟之	一八四五	弘化　二年　七月	一八四五	弘化　二年一二月		
一九代	河瀬安兵衛		一八四五	弘化　二年一二月	一八五九	安政　六年　四月一九日		
二〇代	光永四兵衛	惟資	一八五九	安政　六年　四月	一八六五	慶応　一年　六月		
二一代	丸山平左衛門		一八六五	慶応　一年　六月	一八六七	慶応　三年一〇月　六日		
二二代	井上甚之助	信治	一八六七	慶応　三年一〇月	一八七〇	明治　三年　七月　五日		

（肥後読史総覧　上・下巻）